

3 人間文化研究科の令和7年度FD活動

大妻女子大学大学院人間文化研究科FD委員会は、令和7年度～9年度の3年計画で、大学院におけるFD活動の実施計画を策定した。この実施計画にもとづき、個々の具体的なFD活動を実施してきたので、その実情を以下の通り報告し、今後の活動に繋げたい。

I. 令和7年～9年度大妻女子大学大学院FD実施計画

1. 基本方針

大学院FD委員会の協議のもと、院生の入学から修士課程修了ならびに博士後期課程修了までの全学習・研究過程を視野におさめながら、より質の高い教育ならびに研究指導の実践を目指して、大学院における教育力を高める。よって、大妻女子大学全学の教育力向上に貢献する。

① FD活動の目標

大学院FD活動の目標を次のように定める。

- ① 学部・短大FDと大学院FDの連携のもとで、学部の入学・卒業から大学院入学・修了までを展望したFD活動を実施する。
- ② 教育活動に有益なFDを実施することに努め、教員が協力しやすい状況をつくり、全員の参加を目指す。
- ③ 教員対象のFDにとどまらず、職員や院生の協力・連携を基盤とした、全体的なFDに取り組む。
- ④ 個々のプログラム内容の充実に努め、その成果に関する情報を集積し、関係者の間での共有化を進める。

② FD活動の計画

大学院FD活動の計画は次の通りとする。

- ① 「大学院進学意識に関するアンケート」
- ② 「大学院の研究・教育に関する意見の収集」
- ③ 「大学院修了時アンケート」
- ④ 院生・教員懇談会の実施
開催の時期・方法については、各専攻・専修の協議によるものとする。懇談会の結果、院生からもたらされた意見・要望については、その都度、取りまとめて、FD委員会に報告する。
- ⑤ 学会発表の奨励に関する活動
活動実態については、専攻ごとに取りまとめて、年1回、FD委員会に報告する。
- ⑥ 学内発表会の奨励・支援に関する活動
活動実態については、専攻ごとに取りまとめて、年1回、FD委員会に報告する。
- ⑦ 院生論文集発行の支援に関する活動
「人間生活文化研究:International Journal of Human Culture Studies」を掲載誌とし、編集事務局の援助を受けながら発行していく。
- ⑧ 他大学との各種連携の活性化に関する活動
活動実態については、専攻ごとに取りまとめて、年1回、FD委員会に報告する。
- ⑨ 就職支援に関する活動
活動実態については、専攻ごとに取りまとめて、年1回、FD委員会に報告する。また、大学院生の就職支援体制の充実に努める。
- ⑩ 社会人院生・社会人教育の実質化のための活動
社会人院生に対して制度の充実や環境整備を具体的にどのように推進していくか検討する。
- ⑪ その他の活動
大学院生室の有効活用の検討などを行う

II. FD 活動の実施状況

以下、3つのアンケート調査を実施した。①から③は、Google フォームによる WEB アンケートを利用している。

① 「大学院進学意識に関するアンケート」

大学院修士課程入学者を対象に、10～11 月に実施した。その結果については、「Ⅲ. 大学院進学意識に関するアンケート（結果の概要）」と題して、本報告書に掲載した。

② 「大学院の研究・教育に関する意見の収集」

全大学院生を対象に、昨年度とほぼ同じ内容で 10～11 月に実施した。その結果については、「Ⅳ. 大学院の研究・教育に関する意見の収集（結果の概要）」と題して、本報告書に掲載した。

③ 「大学院修了時アンケート」

令和 8 年 3 月修了予定の修士課程と博士後期課程の院生を対象に 2 月～3 月にかけて実施した。その結果については、「Ⅴ. 大学院修了時アンケート（結果の概要）」として、本報告書に掲載した。

III. 大学院進学意識に関するアンケート（結果の概要）

III-1 はじめに

大妻女子大学大学院人間文化研究科は平成 22 年 4 月（2010 年）に改組して以来、16 年目を迎えた。本年度も「大学院 FD 活動実施計画」に基づき、前年度とほぼ同様の内容で「大学院進学意識に関するアンケート」と「大学院の研究・教育に関する意見の収集」（Ⅳ. 参照）を実施した。前者は修士 1 年生を対象に、後者は大学院生全員を対象に実施した。以下に両調査の結果の概要を提示する。

III-2 進学意識に関する調査の目的と方法

「大学院進学意識に関するアンケート」の目的は、大学院進学にあたっての経緯や動機を把握し、いかにして多くの学生が集まる魅力的な大学院をつくるかの参考にすることにある。調査の方法は志望動機、志望決定にあたっての情報入手経路、他大学との併願状況、修了後のキャリア計画、大学院生活への抱負などを聞いた。

III-3 調査の対象・時期・回収の状況

「大学院進学意識に関するアンケート」は、次の要領に基づいて実施した。

- (1) 調査対象：令和 7 年度人間文化研究科各専攻修士 1 年生 23 名
- (2) 調査期間：令和 7 年 10 月 10 日（金）～10 月 31 日（金）→11 月 14 日（金）まで延長
- (3) 調査方法：Google フォームによる WEB アンケート
- (4) 回収状況：回答数 11 件、回答率 47.8%

令和元年度から今年度までの1年生の回答者数と回答率を表1に示した。

表1 大学院進学意識に関するアンケート（新入学者）

対象者	令和元年度 (R1)	令和2年度 (R2)	令和3年度 (R3)	令和4年度 (R4)	令和5年度 (R5)	令和6年度 (R6)	令和7年度 (R7)
新入学者	18	18	12	27	16	22	23
回答者	17	15	10	16	11	18	11
回答率(%)	94.4	83.3	83.3	59.2	68.8	81.8	47.8

調査期間中、8度、回答催促を行った。その結果、今回の回収率は一昨年度の68.8%および昨年度の81.8%と比較すると減少した。

Ⅲ-4 大学院への進学の動機について

「本学大学院への進学を志望するに当たって、その動機に係る項目1～12に対してどの程度重視しましたか」との問いに対する結果を、表2に示した。「非常に重視した」5点、「かなり重視した」4点、「どちらとも言えない」3点、「あまり重視しなかった」2点、「ほとんど重視しなかった」1点、「まったく考えたことがない」0点として平均点を算出した。

表2 大学院進学にあたって重視した動機項目の順位

		平均点数（5～1点評価）						
		R1 (n=17)	R2 (n=15)	R3 (n=10)	R4 (n=16)	R5 (n=11)	R6 (n=18)	R7 (n=11)
1	将来、研究職・臨床職に就きたいこと	3.4	2.8	3.2	3.6	3.8	3.4	2.9
2	専門分野の学位が取れること	3.6	3.8	3.8	4.2	4.3	4.0	3.2
3	就職に有利になること	2.5	3.0	2.6	2.8	2.5	2.9	2.4
4	自宅・会社からの通学が便利なこと	2.6	3.3	2.9	2.5	2.5	3.8	3.2
5	指導を受けたい教員がいること	4.0	4.5	3.9	4.0	4.2	4.6	3.8
6	大学のネームバリューがあること	1.8	2.5	2.0	2.6	1.8	2.7	1.9
7	就職を先に延ばせること	1.3	1.3	1.2	1.4	1.4	1.3	1.6
8	希望する就職先がなかったこと	0.6	1.4	1.3	0.7	1.7	0.8	1.3
9	奨学金を受給できること	1.8	1.3	0.6	0.9	1.4	1.4	0.4
10	専門の資格が取れること	2.6	2.0	3.1	3.6	3.2	2.8	2.5
11	研究したいことがあること	4.1	4.2	3.6	4.0	4.2	4.5	3.8
12	在学中の学費の支払いのこと	2.9	3.4	2.8	2.9	2.4	3.9	2.7

※表中数値は平均値

大学院進学にあたって重視した項目の中で、「指導を受けたい教員がいること」「研究したいことがあること」といった項目が上位にある。また、「専門分野の学位が取れること」「自宅・会社からの通学が便利なこと」も比較的重要視されていることがわかる。

Ⅲ-5 大学院進学にあたって影響を与えた情報源について

表3 大学院進学にあたって影響源となった項目の順位

		平均点数（5～1点評価）						
		R1 (n=17)	R2 (n=15)	R3 (n=10)	R4 (n=16)	R5 (n=11)	R6 (n=18)	R7 (n=11)
1	本学の先輩の研究成果を見たこと	2.4	2.0	1.6	2.2	2.3	2.4	2.6
2	大学院に行っている友人・知人からの情報	2.9	2.1	1.8	2.2	2.6	2.5	2.9
3	両親や兄弟姉妹から勧められたこと	1.9	1.3	0.9	1.5	1.5	1.4	2.0
4	自分の配偶者の意見	0.8	0.2	1.3	0.7	0.1	0.5	0.3
5	大学院紹介の受験雑誌などの記事	1.1	0.9	0.8	1.9	0.4	2.0	1.3

6	本学発行の大学院紹介パンフレット	2.6	2.3	1.4	3.4	3.1	2.5	3.1
7	学内の大学院進学説明会	1.8	2.6	2.1	3.3	2.8	2.6	2.6
8	学外の大学院進学説明会	0.8	0.2	1.4	1.8	1.3	1.6	0.5
9	本学のホームページの記事	2.9	2.5	1.3	2.9	2.5	2.6	3.4
10	指導教員になる教員との相談	4.2	4.5	3.6	3.6	3.6	4.6	3.5
11	学部時代お世話になった教員との相談	3.1	2.9	2.4	設問欄なし	設問欄なし	設問欄なし	設問欄なし
12	出身の大学の先生との相談	2.5	2.0	2.5	2.6	3.3	3.2	2.5
13	出身の高校の先生との相談	0.4	0.3	0.0	0.2	0.2	0.0	0.6
14	教員の業績と研究テーマをみて、将来自分の研究テーマを追及していくうえで最適な場所と考えたから	3.9	3.9	3.1	3.3	3.4	4.2	3.7
15	他の大学院にはない独創的な文化資源（蔵書、マニユスクリプト、物的資料など）があると考えたから	1.9	2.4	1.6	2.4	1.5	2.2	2.6

※表中数値は平均値

大学院進学にあたって影響を与えた情報源は、「教員の業績と研究テーマをみて、将来自分の研究テーマを追及していくうえで最適な場所と考えたから」の平均点数が 3.7 と高かった。また、「指導教員になる教員との相談」も 3.5 と高かった。

III-6 他大学の受験状況：

「他の大学院を受験しましたか」の質問に対しては、11 名中 8 名が「いいえ」と答えた。回答者の内、他大学大学院受験生は 3 名であった。

III-7 大学院修了後の進路及びどのような大学院生活を送りたいか

「大学院修了後の進路は、どのように考えていますか」については、令和元年度からの推移を表 4 にまとめた。複数回答であるため、数字は回答率で示した。

表 4 大学院修了後の進路について（複数回答）

	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7
1 博士後期課程に進学したい	35	13	0	37	36	22	9
2 外国に留学したい	6	0	10	6	9	11	0
3 教育職員（専修）（幼稚園・小・中・高校・栄養教諭）として就職したい	12	13	0	6	18	11	27
4 専門社会調査士として就職したい	6	0	0	0	0	0	0
5 臨床心理士として就職したい	24	13	40	44	27	16	45
6 研究機関で研究開発の仕事に就きたい	24	13	20	19	27	11	9
7 民間企業で一般職の業務に就きたい	24	20	0	19	18	33	9
8 民間企業で総合職の業務に就きたい	24	13	30	12	0	22	18
9 公務員として就職したい	12	20	0	25	18	0	18
10 大学教員として就職したい	29	13	0	12	27	27	18
11 まだ具体的に考えていない	18	27	60	19	27	27	45

※表中数値は%

※複数回答のため、合計は100%を超えている。

大学院修了後の進路は回答率が高い順に、「臨床心理士として就職したい」と「まだ具体的に考えていない」が 45%、「教育職員（専修）（幼稚園・小・中・高校・栄養教諭）として就職したい」が 27%、「民間企業で総合職の業務に就きたい」と「公務員として就職したい」と「大学教員として就職したい」が 18%という結果が得られた。

「どんな大学院生活を送りたいか」の質問に対しては、令和元年度からの推移を表 5 にまとめた。複数回答であるため、数字は回答率で示した。

表5 どんな大学院生活を送りたいか（複数回答）

	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7
1 専門分野についての研究中心の生活をしたい	59	53	30	37	54	50	45
2 研究（実験・実習を含む）と自由時間をバランスさせたゆとりある生活をしたい	53	80	70	62	72	55	73
3 たくさん授業科目を履修して社会に出るための教養を深めたい	18	0	30	25	18	16	18
4 就職活動や資格を取るための時間を多くしたい	18	0	30	25	9	16	18
5 就職活動を早めに始めて、まずは就職を決めたい	12	20	20	12	0	16	18
6 狭い専門分野の研究にこだわらずに、幅広い分野の知識を得たい	18	47	30	56	27	16	54
7 アルバイトや遊びはできるだけ控えたい	12	7	10	12	9	5	9
8 アルバイトや遊びも大いにやりたい	12	13	20	19	27	27	36
9 自由な時間をできるだけ楽しみたい	18	33	20	25	36	11	18
10 どうするか、まだはつきり考えていない	9	7	0	0	0	5	27

※表中数値は%

※複数回答のため、合計は100%を超えている。

どんな大学院生活を送りたいかについては回答率が高い順に、「研究（実験・実習を含む）と自由時間をバランスさせたゆとりある生活をしたい」73%、「狭い専門分野の研究にこだわらずに、幅広い分野の知識を得たい」54%、「アルバイトや遊びも大いにやりたい」36%という結果が得られた。

Ⅲ-8 大学院進学に当たって一番考えたこと、悩んだこと

「大学院進学に当たって一番考えたこと、悩んだこと」の質問に対しては、以下の6件の記載があった。

- ・金銭的負担。大学院進学により就職がさらに不安になること。
- ・大学と現在の職の両立（自分の能力ではあまり厳しいと両立は不可能と思っていたから）
- ・先生方との相性、十分に研究を学べる環境にあるかどうか。
- ・先生から大妻の大学院の社会学専攻は基本的に1人くらいしか入学しないため、同期に刺激を受けたり、同期との交流がないことの孤独感や、研究についての相談をできない点は考えたほうがいいと言われていたので、1人で院生生活を送らなければならない点はかなり悩んだ。実際に、入学後ほかの学部の大学院生と関わる機会もなく、常に1人で授業を受け、生活しているが私はもともとかなり1人が好きな性格なため、さほど孤独感のようなものは感じずにいるものの、大抵の人は少し病んだりしてもおかしくはないと思う。もう少し大学院同士で研究を相談したりできるような機会があるといいなと思う。
- ・通学・授業参加方法（県外のため）、履修方法（長期履修とするかどうか）、生活習慣（仕事と大学院の両立）、学業（ついていけるか）
- ・仕事と学業の両立

IV. 大学院の研究・教育に関する意見の収集（結果の概要）

「大学院の研究・教育に関する意見の収集」は、全大学院生を対象に授業内容、履修環境、事務体制に対して点数による客観的評価と自由記述による意見を集約し、授業方法の改善、カリキュラムの構成、設備の整備など、教育改革に反映させることを目的としている。

平成25年度から回答を、「非常にそう思う；5点」から「まったくそう思わない；1点」までの5段階評価としている。評価点は、回答者全員の平均点と最高点、最低点を算出している。

- (1) 調査対象：大学院人間文化研究科に在籍する大学院生 57 名
- (2) 調査方法：Google フォームによる WEB アンケート
- (3) 調査期間：令和 7 年 10 月 10 日（金）～10 月 31 日（金）→11 月 14 日（金）まで延長
- (4) 回収状況：回答数 37 件 回答率 64.9%

結果の概要は以下の通りである。

IV-1 各評価項目

大学院の授業全般についての評価は表 6 の通りである。問 1 から問 5 までの各項目の全平均は 5 段階評価でいずれも 4.1 以上の高い評価が得られた。

表 6 大学院の授業全般についての評価

課程	回答数	問1	問2	問3	問4	問5
		シラバスに記載された到達目標に示された知識や能力を獲得できた	授業の水準や範囲は大学院の授業として適切であった	授業の内容は専門知識等を習得する上で十分な意義が感じられた	研究指導や論文指導のあり方について適切であった	学外研究・学外実習について希望通り実施することができた
修士課程	28	4.0	4.5	4.7	4.5	4.4
博士後期課程	9	4.3	4.3	4.4	4.3	4.6
全平均	37	4.1	4.4	4.6	4.4	4.4
最高点	37	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
最低点		3.0	2.0	3.0	2.0	3.0

※表中数値は平均値、最高点及び最低点

大学院の履修および研究環境については表 7 の通りである。

問 6 から問 9 までの各項目の全平均は 5 段階評価でいずれも 4.0 以上の高い評価が得られた。

表 7 大学院の履修および研究環境について

課程	回答数	問6	問7	問8	問9
		システム全般の手続き方法について分かりやすかった	ガイダンスの日程や実施方法について適切であった	図書館他学校の施設設備について満足している	院生自習室の利用方法について満足している
修士課程	28	4.0	4.1	4.2	4.2
博士後期課程	9	4.1	4.1	3.7	3.7
全平均	37	4.0	4.1	4.1	4.1
最高点	37	5.0	5.0	5.0	5.0
最低点		1.0	1.0	2.0	2.0

※表中数値は平均値、最高点及び最低点

教育・研究支援については表 8 の通りである。

問 10 から問 12、問 15 までの各項目の全平均は 5 段階評価でいずれも 3.6 以上と一定の評価が得られた。

表 8 教育・研究支援について

課程	回答数	問10	問11	問12	問15
		院生自習室の設備について満足している	事務職員の対応は適切であった	大学院の学費・奨学金は適切であった	授業の開講時間など適切な配慮がなされ、履修することができた。
修士課程	28	3.6	4.2	3.8	4.4
博士後期課程	9	3.5	4.3	3.9	4.5
全平均	37	3.6	4.3	3.8	4.4
最高点	37	5.0	5.0	5.0	5.0
最低点		1.0	2.0	1.0	2.0

※表中数値は平均値、最高点及び最低点

IV-2 大学院の授業全般（問 1～5）、履修・研究環境（問 6～9）、教育・研究支援（問 10～12）に関する自由記述欄への記述状況

自由記述欄に記載された意見については、そのままの意見を箇条書きで以下に記載する。

問1.「大学院の授業ではシラバスに記載された到達目標として示された知識や能力を獲得できた。」

- ・教授が講義をドタキャンするなど、まともに講義が実施されない授業がこれまでに一つあった。私はすべて出席したが、知識を得どころか、きょうは講義があるのかばかりに意識が向き、講義があったとしても、教授が遅刻、またはほぼ講義しないまま切り上げてしまうといった事態が続いた。いったい大妻の大学院はどうなっているんだろう？と、不信感が高まった。とくに提出物などがあるわけでもないし、私は出席しているのに成績が A の評価とったことも納得がいけない。時間とお金を無駄にしたとしか言いようがない。あまりに業務が忙しく、成績に異議申し立てができることもわからずとつくに期間がすぎた。何とかしてもらいたい。
- ・複数での受講は他の人からの情報や考えを聞くことができ学びになります。自身の知識や能力への評価は難しいです。
- ・論証に必要な資料を把握していく方法を得られたことは、特に大きな収穫である。
- ・シラバスに記載されている以上に、受講者のニーズに合わせて内容を決めてくださり新たな知見を得られたり、学びが深まりました。

問2.「授業の水準や範囲は大学院の授業として適切であった。」

- ・いい先生によりやく数名めぐりあうことができたものの、とにかく上記問 1 の先生などのこともあるので。
- ・博士論文執筆に有益な水準・範囲である。

問3.「授業の内容は専門知識等を習得する上で、十分な意義が感じられた。」

- ・専門的な事柄が、実際の生活にどう活かせるかをも学べる内容であった。

問4.「研究指導や論文指導のあり方について適切であった。」

- ・第一線の研究者から、研究方法や論文執筆方法を学べる、有難い機会である。
- ・先生方が、個々の研究内容に合わせて親身になってご指導くださり感謝の気持ちでいっぱいです。

問5.「学外研究・学外実習について希望通り実施することができた。」

- ・貴重な史料の調査に同行できたことは、本大学院に在籍していたから得られた機会であった。
- ・研究内容に合わせて、フィールドの開拓などに協力してくださり、充実した研究活動が行えています。

問 6.「システム全般（UNIPA での履修登録、研究助成）の手続き方法について分かりやすかった。」

- ・非常にわかりにくいし、メールで質問しても、回答がなかなか得られないなど、非常に苦勞した。10 年以上大学院生がいなかったため、まわりに相談したり、教えてくれる人もおらず（教授に相談したが詳細な内容把握までできていない）、先輩がいないというハンデを非常に感じた。サポート体制の充実を希望する。
- ・履修登録が便利である印象はかなり強かった。研究助成も、電子申請が便利であることのほか、申請書類作成の段階で論文の全体像が見渡すことが出来る点は意義が大きかった。
- ・UNIPA の使い方（教室や履修の見方）がよく分からず、今でもあまり使えていない。お知らせから「添付資料をご確認ください」とありながら、そのリンクに飛べず、資料を探すのに手間取ってしまった。
- ・時々、内容の区別ができずに提出を遅延してしまいました。こちらの確認不足です。

問7.「ガイダンスの日程や実施方法について適切であった。」

- ・今年度は早めに日程がわかり、良かった。
- ・仕事をしながらできるように、ゼミの先生が個別でガイダンスをしてくださったり、オンラインでガイダンスに参加できた。ありがとうございます。
- ・無駄の無い日程や実施方法だった。
- ・同じ専攻の同期がいないため院生同士でコミュニケーションをとったことが一度もない。ある程度は仕方がないが、院生同士の交流をもてる機会があると嬉しい。
- ・学内で仕事をしているため、仕事としてのガイダンスと学生としてのガイダンスがかぶってしまいすべて出ることは叶わなかったが致し方ないと思います。ただ、ガイダンスに出られなかった場合の資料配布などを得られたので特に問題なく学生生活を進められました。

問8.「図書館他の学校の設備について満足している。」

- ・（千代田校）映像資料の視聴のために、Blu-ray の持ち込みと再生機器の利用を許可してほしい。自宅にブルーレイ・ディスクの再生機器がなく、大学でも教室を予約しないと視聴できないため。
- ・（千代田校）いつも閉架図書の出納をしていただき感謝しております。1 階での収蔵図書の展示も楽しいです。
- ・就学期間を超えている学生は、年度を跨ぐ際に図書を全て返却する必要があり、新しい学生証が交付されるまで借りられなかった。長期期間こそ研究を進めたいのにと不甲斐なかった。学費は払っているのに。

問 10.「大学院生室・大学院生自習室の設備（PC・プリンタなどの設置機器、辞書・参考文献などの資料、室内レイアウト）について満足している。」

- ・（千代田校）ホチキスが置かれるようになり、持参忘れでも、対応できるようになって嬉しい。
- ・（千代田校）遠隔地に居住していることもあり、都内滞在中の研究拠点として極めて便利に感じる。
- ・（千代田校）利用していない

- ・(千代田校) 途中より移動があったが、使い勝手が良くなかった。また、院生が自由に使える部屋は数が減ったことに加えて、いつも誰かが一日中独占している状況が続いており、使えない日が多かった。
- ・(千代田校) 集中できる環境を整えていただいているので活用しています。
- ・(多摩校) 通常 21 時まで、守衛室に連絡をすれば 22 時まで残ることができるが、23 時まで残れるようにしてほしい。
- ・どちらの院生室においても、ウォーターサーバーがあると非常に嬉しい。

問 11. 「事務職員の対応は適切であった。」

- ・(千代田校) 対等に接して下さっているようで恐縮ですが、おかげさま用件が円滑に進みます。感謝しております。
- ・(千代田校) いつも丁寧にご対応くださり感謝しております。

問 12. 「大学院の学費・奨学金制度について」

- ・高い。
- ・高すぎず、助かった。
- ・学費が安価のためありがたいです。
- ・これほどの教育を受けられる学費としては安い。
- ・大学院生は大学院生で、学部とは別の枠を作してほしい。特に学部からストレートで進学している学生は生活が厳しい。

IV-3 ハラスメントについて

ハラスメントに関する令和元年度からの調査結果を図 1 に示した。令和 7 年度は「経験がある」が 5 名、「答えたくない」が 3 名であった。自由記述欄には 1 名が次のような意見を述べていた。なお、アンケートを取る際に回答結果は慎重に扱う旨、例年通り明記している。

- ・講義がまともに行われない。業務について馬鹿にするような発言をしているのを耳にした。

より個別的な指導が中心となる大学院教育においては、ハラスメントが生じやすい状況になる可能性は高く、本学では学生が副指導教員を含めた複数の教員から指導を受けられる体制を整え、学生の SOS 信号をできる限り早いうちに見つけ出す仕組みを確立している。さらに、このような案件に対しては指導教員の変更も可能にしている。

今後も、昨年度に引き続き、次に記すハラスメント防止対策を徹底する。

- ① FD アンケートの回答について、修了生も申し出ができる機会を確保する措置を講じる。
事案には FD 委員、ハラスメント委員、専攻教員が適宜対応する。
- ② ハラスメントに関する回答の FD 報告書への記載は、一部表現について個人を特定しづらい形に修正する。
- ③ 代議員会、専攻会議等で FD 報告書を説明する際、ハラスメントに関するアンケート結果を必ず報告し、注意喚起を行う。

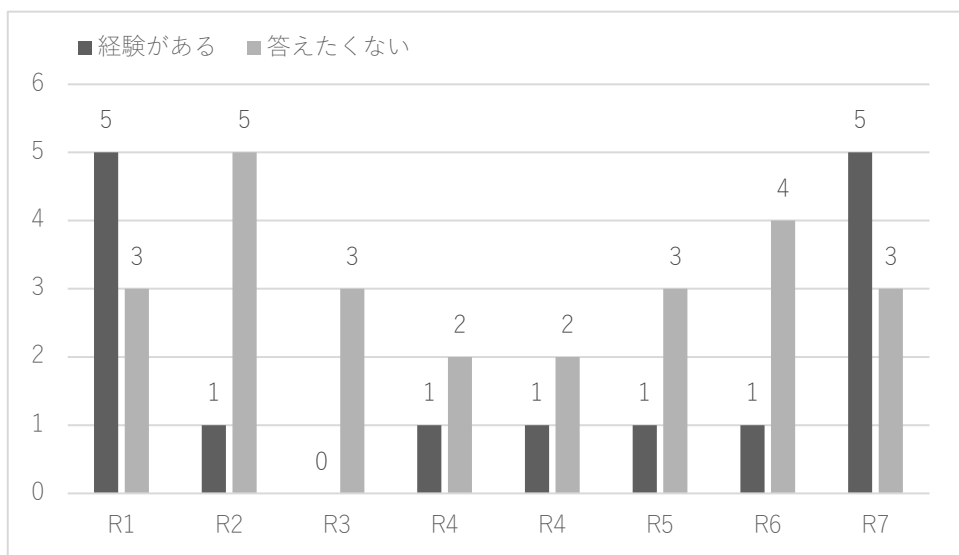


図1 ハラスメントについて

IV-4 社会人特別選抜の入学者への配慮について

社会人特別選抜の入学者を対象にした「授業の開講時間など適切な配慮がなされ、履修することができた」かの問いでは14名から回答を得た。80%が「5 非常にそう思う」か「4 そう思う」のいずれかであった。

社会人入学者の自由記述は5件あった。

- ・社会人のため基本的にはオンラインで対応いただいています。教員や事務の方に柔軟に対応いただけるおかげで、学習を続けることができています。
- ・最初は「配慮する」と聞いて入学したものの、結局都合のいい時間に必要な授業が開かれるということではなく、内容に関わらず、とにかく日程的にとれる授業をとる、という本末転倒な状態になっている。
- ・なかなか授業日程が決まらず、仕事との調整が難しい。受講者が、決まった時点で講師との調整が開始するか、第一回目は対面などが決まっていると予定を立てやすい。オンラインや集中講義、土日など柔軟にしてもらえているのは他校にない配慮だと思う。
- ・オンラインや土日や長期休業中などに開催してくださるなど、柔軟に対応してくださった。ありがとうございます。
- ・授業の開講時間について、各先生方に大変融通を利かせていただきました。その節は大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

IV-5 その他意見・希望について

この質問に対する自由記述欄には以下のような記述があった。

- ・授業に院生以外の方が参加する時は、前もって連絡をして頂きたいです。教室に行くまで誰が居るか分からないというのは少し不安です。よろしくお願いいたします。(多摩校)
- ・今年度で卒業ができるのか不安なところありますが、これまで多くのご教示をしていただきましてありがとうございました。今後とも何卒よろしくお願いいたします。
- ・大変お世話になっております。自分の専攻科目について、学部時代より深く理解できていると実感できています。また、私は自分の専攻以外の授業を好んで履修しているのですが、大学時代よりも楽しく学べており、かつ自分の力になっていると実感でき、とても充実し

た日々を過ごしております。本当に大妻の大学院に入学できて心から良かったです。
今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

V. 大学院修了時アンケート（結果の概要）

V-1 大学院修了時アンケートの目的

このアンケートは、令和8年3月修了予定の修士課程と博士後期課程の院生を対象に在学期間中の学修環境や体験・修得した能力について把握し、また自由記述による意見を集約することで、教育・研究環境改善につなげることを目的として、令和3年度より新たに実施した。

V-2 調査対象・方法・期間・回収状況

- (1) 調査対象：大学院修士課程及び博士後期課程修了予定者（満期退学含む）24名
- (2) 調査方法：Google フォームによる WEB アンケート
- (3) 調査期間：令和8年2月23日（月）～3月5日（木）→3月8日（日）まで延長
- (4) 回収状況：回答数 16 件 回答率 66.6%

※今年度、博士後期課程言語文化学専攻で修了者はいない。

	博士後期課程 人間生活科学 専攻	博士後期課程 言語文化学 専攻	修士課程 人間生活科学 専攻	修士課程 言語文化学 専攻	修士課程 現代社会研究 専攻	修士課程 臨床心理学 専攻
回答数	3	0	4	6	1	2

結果の概要は以下の通りである。

V-3 学修環境等についての評価

評価は表9の通りである。問1から問6までの各項目は4段階評価で「そう思う」4点、「ある程度そう思う」3点、「あまりそう思わない」2点、「そう思わない」1点として平均点を算出した。

表9 研究・授業、進路、学生生活についての評価

	回答数	問1	問2	問3	問4	問5	問6
		本学大学院在学中は研究・学業に意欲的に取り組みましたか	開講科目の数や種類は十分でしたか。	授業内容は、全体として満足していますか。	研究指導や論文指導について指導教員から十分な指導を受けることができましたか。	修了後の進路は希望に沿ったものになりましたか	大学院での学生生活に満足していますか。
全平均	16	3.9	3.6	3.7	3.8	3.9	3.5
最高点		4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0
最低点		3.0	3.0	2.0	2.0	3.0	2.0

※表中数値は平均値、最高点及び最低点

問1から問6までの各項目の全平均は4段階評価でいずれも3.5以上とかなり高い評価が得られた。

V-4 大学院在学中に体験・修得した能力

知識や能力の向上に大きく役立ったことを表10に、在学中に修得した能力について表11にまとめた。複数回答であるため、数字は回答率で示した。

表 1 0 知識や能力の向上に大きく役立ったことについて（複数回答）

	R3	R4	R5	R6	R7
1 大学院での授業全般	70.0	50.0	78.6	83.3	93.7
2 指導教員による指導	90.0	75.0	64.3	83.3	81.2
3 研究活動	90.0	50.0	75.0	83.3	81.2
4 論文執筆	70.0	25.0	78.6	66.7	68.7
5 論文発表、最終試験	50.0	25.0	57.1	66.7	62.5
6 資格取得	0.0	12.5	25.0	16.7	25.0
7 院生時代に築いた人脈	50.0	50.0	53.6	41.7	50.0
8 その他	0.0	12.5	7.1	25.0	12.5
9 特に役立っているものはない	0.0	12.5	0.0	0.0	0.0

※表中数値は%

※複数回答のため、合計は100%を超えている。

知識や能力の向上に大きく役立ったこととしては、「大学院での授業全般」が 93.7%と高い回答率を示した。また「指導教員による指導」や「研究活動」も 81.2%と高かった。「特に役立っているものはない」の回答率が 0%であったことから大学院の授業と研究活動、それに対する教員による指導といった大学院生活の中核的な営みが院生の知識や能力の向上に確実に寄与していたと言えるだろう。

「資格取得」は 25.0%に留まっているが、カリキュラムが専門資格の取得に関連する専攻と、そうでない専攻があるため、全専攻の院生に回答してもらう必要があるのか疑問が残る設問ある。資格取得が重要な専攻にとって、回答率の結果があまり参考にならないため、今後、設問の見直しも必要であろう。

表 1 1 在学中に修得した能力について（複数回答）

	R3	R4	R5	R6	R7
1 教養	30.0	12.5	35.7	75.0	43.7
2 ものごとを分析する力	90.0	50.0	64.3	58.3	68.7
3 問題を論理的に考える力	80.0	50.0	57.1	50.0	93.7
4 特定の専門分野に関する理解力	70.0	75.0	75.0	66.7	68.7
5 肯定的な意味で批判的に考える力	30.0	37.5	17.9	58.3	62.5
6 自分と異なる意見や考え方を柔軟に理解する力	60.0	75.0	32.1	66.7	50.0
7 リーダーシップ	0.0	12.5	7.1	8.3	18.7
8 人間関係を築いたり調整する力	30.0	87.5	32.1	41.7	25.0
9 地域社会が抱える問題への関心や理解力	20.0	37.5	14.3	25.0	31.2
10 明快かつ簡潔に話す力	20.0	25.0	28.6	33.3	50.0
11 表現すべき内容の文章を書く力	50.0	62.5	46.4	41.7	62.5
12 英語以外の外国語の運用力	0.0	0.0	3.6	0.0	6.2
13 プレゼンテーションを準備し発表する力	60.0	50.0	53.6	58.3	50.0
14 学術的な文献の読解力	40.0	62.5	39.3	41.7	62.5
15 情報技術（ICT）の運用力	10.0	0.0	17.9	0.0	12.5
16 国際的な諸問題に対する関心や理解力	0.0	0.0	3.6	8.3	12.5
17 英語の運用力	0.0	0.0	3.6	8.3	0.0
18 ものぐとの本質をみて判断しようとする力	50.0	37.5	28.6	41.7	62.5
19 自分を律して行動する力	40.0	37.5	25	33.3	43.7
20 得た知識やスキルを活かして問題を解決する力	60.0	50.0	21.4	33.3	50.0
21 これらの項目については特に伸びていない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

※表中数値は%

※複数回答のため、合計は100%を超えている。

在学中に修得した能力については「問題を論理的に考える力」が93.7%、「ものごとを分析する力」と「特定の専門分野に関する理解力」が68.7%と回答率が高かった。また「肯定的な意味で批判的に考える力」、「表現すべき内容の文章を書く力」、「学術的な文献の読解力」「ものごとの本質をみて判断しようとする力」が62.5%となった。

これらの結果は、修了生の多くがカリキュラム・ポリシーに沿った教育を受け、ディプロマ・ポリシーに定められた専門知識や技能を修得したと評価しているものと考えられる。ただし、21世紀の社会において指導的な役割を担うための「リーダーシップ」についてはまだ課題が残っていると言えよう。

V-5 教育全般についての自由記述

教育全般について、以下のような自由記述があった。

- ・保育・教育学専攻は私を含め、現職教員が所属していることが多くある気がします。一方で、仕事をしながらでは実現ができないような時間帯に、ガイダンスや集まりが設定されていることがありました。もちろん、大学側の勤務時間のこともあるため、「絶対変えてほしい」という気持ちはありませんが、ガイダンスのオンライン配信や、土曜日の設定など選択肢が広がると、嬉しいなと感じました。とはいえ、メールでのやり取りなど、柔軟に対応してくださり、感謝しかありません。ありがとうございます。
- ・大学院生室にシュレッダーがあると便利だと思いました。修士論文を書く際に印刷した資料に、個人情報が含まれているため、処理するのに困った記憶があります。個人情報保護の観点から、シュレッダーがあると、非常に便利だと感じました。
- ・私は男性という立場にも関わらず、入学させていただき、研究活動のきっかけを与えてくださった大妻女子大学、1から全てを教えてくださった大学の先生方、倫理申請や事務処理など、何度もご迷惑をおかけしてしまいましたが、最後まで付き合ってくださいだった事務局の方々には、感謝しかありません。本当にありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。
- ・2年間学ばせていただきました。先生のご指導のおかげでどうにか論文を書き終え、発表まで終わることができました。本当に感謝しています。また、大学院での科目は、教育、福祉、心理と幅広く、履修した科目すべてが自身の教員の職務に活かせることばかりでした。また、社会人ということもあり、柔軟に授業時間や授業形式を設定していただき、大変感謝しています。ここで学んだことを現場で活かし、また研究の世界に戻ってきたいなとも思います。ありがとうございました。
- ・5年間お世話になりました。指導教員、副指導教員の先生方には、大変お世話になりました。研究活動における協力者への関わり方や、方法論等、研究全般において、誠実な態度で研究を進めていくことの大切さを学びました。そして何よりも、常に私のリサーチクエストを尊重してくださり、共に試行錯誤してくださったり、的確なアドバイスをくださったりと、研究活動をいつも支えてくださいました。感謝の気持ちでいっぱいです。また、ここでの学びは、研究に関することだけにとどまらず、教員が学生の思いにどのように寄り添い、応答していくのかという教育者としての振る舞いのようなものもあり、今後も教育現場に従事しようと考えている私にとって、重要な学びであったと感じています。さらに、メンタルヘルスに関する動画を配信してくださったり、常に院生室を綺麗に保ってくださいたりなど、環境面でもバックアップしてくださったことに心より感謝申し上げます。本学を選んで本当に良かったです。ありがとうございました。
- ・熱心に指導してくださる先生方に恵まれていると改めて感じた2年間でした。社会人学生として、理解力が乏しく、困らせてしまう場面も多々あったかと思いますが、根気強く指導してくださった先生方には感謝しかありません。これまでのご指導、心より感謝申し上げます。また、社会人に対する授業時間の設定における融通さや開催方法の選択ができる授

業体制はとてもありがたく、その一方で先生方には大変労力をかけさせてしまったとも考えています。そちらも併せて、感謝申し上げます。

VI. 院生・教員懇談会の実施

開催の時期・方法については、各専攻・専修の協議によるものとした。今年度の実施状況は以下の通りであった。

専攻	実施内容
人間生活科学専攻D	7月28日(月)に専修内で修士課程の学生と共に博士課程の学生の論文進捗状況発表会を対面で実施し、修士課程・博士課程の学生と教員との交流を促す意味で軽食を配布した(保育・教育学)。
人間生活科学専攻M (健康・栄養科学専修)	令和8年2月14日(土)に対面方式で専修内修士論文発表会を実施した。発表会終了後には、修士・博士課程の大学院生と教員による懇談会を開催した。
(生活環境学専修)	在籍学生が1名でしたので、実施していません。
(保育・教育学専修)	7月28日(月)に専修内修士論文進捗状況発表会、11月24日(月)に専修内修士論文計画発表会、令和8年2月11日(水)に専修内発表会をそれぞれ対面で実施した。7月の発表会のときには夕方の時間帯でもあり、院生と教員との交流を促す意味で軽食を配布した。
言語文化学専攻 (日本文学専修)	言語文化学専攻日本文学専修では、例年「日本文学専修院生研究発表会」終了後、日本文学専修の院生及び教員の懇談をおこなうが、今年度は教員側出席予定者が1名であり、その教員が院生からの意見や要望を普段から受け付け対応していたため、懇談会自体は中止した。
(英語文学・英語教育専修)	10月30日(木)に、大学院生研究発表会を開催した。発表会の後で院生・教員懇談会を開催し、院生、来年度院に進学する学生、そして大学院を担当する教員が懇談をした。そこで院生たちからの質問に答え、要望を聴取した。
(国際文化専修)	6月3日(火)昼休みに大学院生および指導教員が昼食会をおこない、院生・教員懇談会とした。
現代社会研究専攻 (情報コミュニケーション専修・臨床社会学専修)	本専攻は、2キャンパスにそれぞれ2専修の学生が在籍することになっており、さらに社会人院生が多いのも特徴であり、学生がオンラインを使っても一堂に会することが難しい状況にある。したがって、現時点では主査・副査を中心とした教員が、各学生から授業・研究環境に関して意見交換する機会を設けており、教員から専攻主任・代議員に学生からの要望等が集約されるようになっている。 今年度も、特に多摩キャンパスの現代社会研究専攻院生室への要望が具体的に上がり、研究環境整備を行うと共に、各教員に学生の様子が伝えられる関係が成立してきている。 来年度は、千代田キャンパスに情コミ専修1名、臨床専修1名、多摩キャンパスに情コミ専修1名、臨床専修4名の院生が在籍することから、キャンパスごと、また専修ごとの学生と教員の懇談や交流を企画していきたい。
臨床心理学専攻	5月に新入生歓迎会を開催し、大学院生と教職員が交流した。また7月に、講義、臨床心理実習、自習室の環境や学生生活等について、院生から意見や要望、質問等を出してもらうように依頼した。その後、提出された意見等(自習室のプリンターの不具合、キャリア形成に関連して修了生等の話を聞きたいなどの要望)に関し、院生と教員とでオンライン会議を開き、質疑応答と意見交換の時間を設けた。後期には院生の要望を受け、教育、福祉分野の修了生等による説明会を3回実施した。その他、令和8年2月には非常勤講師(スーパーヴァイザー)と院生の顔合わせと交流を目的とした懇談会を実施し、さらに3月にはFD委員が院生との面談を行うなど、昨年以上に定期的なFD活動を行い、その結果を大学院教育と院生生活の整備に還元している。

VII. 学会発表の奨励に関する活動

学会発表に備えて、院生の各種学会への参加を奨励してきた結果、今年度の参加状況は次表の通りであった。活動類型のうち、「学会参加」のカテゴリーには「各種シンポジウム」「全国フォーラム」等への参加も含むが、学会での「発表」は含まないものとし、別途、IXに記載する。

専攻	活動類型	件数	内容
人間生活科学専攻 博士後期課程	学会参加	2 件	【健康・栄養科学専修】 日本食物繊維学会第 30 回学術集会、第 78 回日本保育学会大会
言語文化学専攻 博士後期課程	学会参加	10 件	【国際文化専修】 キリシタン学研究会第 7 回例会、2025 年度中国文化学会大会、第 40 回漢文教育研究会、日本ギリシャ協会主催シンポジウム、全国かくれキリシタン研究会、比較文化学部主催特別講演会、白山中国学会、第 35 回 書学書道史学会大会、令和 7 年度共同研究プロジェクト 講演会、人間生活文化学会創設記念シンポジウム
人間生活科学専攻 修士課程	学会参加	18 件	【健康・栄養科学専修】 日本栄養・食糧学会関東支部シンポジウム、第 78 回日本保育学会大会、管理栄養士・栄養士スキルアップセミナー、第 72 回日本改善学会学術総会、2025 年度全国栄養士大会、第 21 回日本栄養改善学会北陸支部学術総会、第 79 回日本栄養・食糧学会大会、日本食物繊維学会第 30 回学術集会、日本薬学会 【生活環境学専修】 第四次住宅整備後期方針シンポジウム、coton シンポジウム 2026「まちに農のある風景を」 【保育・教育学専修】 日本学童保育学会第 15 回研究大会、第 60 回全国学童保育研究集会、第 8 回ホリスティック教育/ケア学会研究大会、日本保育学会第 78 回大会、第 16 回幼児教育実践学会、第 10 回日本保育者養成教育学会研究大会、日本理科教育学会
現代社会研究専攻 修士課程	学会参加	7 件	【情報コミュニケーション専修】 戦前研究会、行動生物学会研究会、ソーシャルワーク研究所第 20 回シンポジウム 【臨床社会学専修】 思春期青年期精神療法学会、児童青年精神医学会、青年期精神療法学会、認定精神保健福祉士更新研修
臨床心理学専攻 修士課程	学会参加	7 件	思春期青年期精神療法学会、児童青年精神医学会、青年期精神療法学会、認定精神保健福祉士更新研修、日本心理臨床学会第 44 回大会、日本家族心理学会第 42 回大会、日本応用学会第 41 回大会

Ⅷ. 学内発表会の奨励・支援に関する活動

学内での論文発表会については、「令和 7 年度大学院要覧」11 頁に、「修士論文審査等に関する日程」のうち、第 8 番目の項目に「論文発表会の開催」として記載されている。その修士論文発表会を、令和 8 年 2 月 21 日に実施した。総勢 19 名の院生が発表した。当日のプログラムを以下に掲載しておく。

令和7年度 修士論文発表プログラム (オンラインによる開催)

日時 令和8年2月21日(土)9:00開始(ミーティングへの入室は8:40から可)

開会の挨拶 青江 誠一郎 人間文化研究科長

総合司会 蔵野 ともみ 教務委員長

開始予定時刻	発表順	発表者	
9:00		蔵野ともみ 教務委員長プログラム説明	
9:05		青江誠一郎 研究科長あいさつ	
9:10	1	臨床心理学専攻	
9:27	2	臨床心理学専攻	
9:44	3	臨床心理学専攻	
10:01	4	臨床心理学専攻	
10:18	5	現代社会研究専攻	
10:35～10:45 休憩・接続確認			
10:45	6	言語文化学専攻	日本文学専修
11:02	7	言語文化学専攻	日本文学専修
11:19	8	言語文化学専攻	英語文学・英語教育専修
11:36	9	言語文化学専攻	英語文学・英語教育専修
11:53～13:00 昼食休憩・接続確認			
13:00	10	言語文化学専攻	国際文化専修
13:17	11	言語文化学専攻	国際文化専修
13:34	12	言語文化学専攻	国際文化専修
13:51	13	言語文化学専攻	国際文化専修
14:08～14:20 休憩・接続確認			
14:20	14	人間生活科学専攻	健康・栄養科学専修
14:37	15	人間生活科学専攻	保育・教育学専修
14:54	16	人間生活科学専攻	保育・教育学専修
15:11	17	人間生活科学専攻	保育・教育学専修
15:28	18	人間生活科学専攻	保育・教育学専修
15:45	19	人間生活科学専攻	保育・教育学専修

・持ち時間1人17分(発表12分、質疑応答・交代5分)です。発表開始から12分経過時、17分経過時が分かるよう、Zoom上でお知らせします。

・発表開始時間は進行状況により前後する場合があります。また、通信の不具合やその他の都合により発表が開始されない場合は、発表順を変更する場合があります。

【オンライン実施上の注意】

- ・Zoomを利用して開催します。ミーティングのURLは、別途送信するメール本文でご確認ください。
- ・Zoomの個人表示名は自身の氏名にしてください。発表者は氏名の前に「発表」の文字を入れてください。
(例: 発表 大妻花子)
- ・発表時、Zoomを接続している場所の周囲の環境音や、紙をめくる音などが雑音としてマイクに入ることがありますので、極力静かな環境で参加してください。
- ・入室時はマイクをミュートにし、発表順になったらミュートを解除してください。発表の2分前にはマイク・カメラを用意し、パワーポイント画面共有の準備をしておいてください。
- ・ご自身の発表時以外はマイクをミュートにしてください。カメラはオン・オフどちらでもかまいません。
なお、発表者への質疑時に発言する際は、マイク及びカメラを必ずオンにしてください。
- ・自分の発表以外は録音や録画をしないでください。

Ⅸ. 院生論文集発行の奨励・支援に関する活動

研究科の設置の趣旨に適合した院生論文集として、「人間生活文化研究:International Journal of Human Culture Studies」に掲載している。令和 7 年度の修士論文概要は、オンラインジャーナルの”No.36 2026”に掲載される。各専攻での研究教育活動の状況は以下の通りであった。研究教育活動の内容を「論文発表」「口頭発表」「ポスター発表」に分けて以下に示す。

専攻	発表形式	題目
人間生活科学専攻 博士後期課程	論文発表	子どものくつくる>諸相-小学 2 年生 O 君の「いちご」
	論文発表	子どものくつくる>活動のエスノグラフィー(2) —素材・道具・人・時間の交錯から立ち現れた〈生成のリズム〉の試論—(査読付)
	論文発表	手を動かすことからひらかれる子どもの世界 (査読付)
	ポスター発表	意味が立ち上がる前にある造形の時間
	口頭発表	保育における遊び場面の「リスク」とは
	口頭発表	パネルシアターを媒介にしたストーリーメイキングのプロセスの質的検討:素材との出会いと「物語るからだ」の生成
	論文発表	子どもによるパネルシアター —ナラトロジー分析による表現メディアとしての特徴の分析—
	論文発表	幼児のコミュニケーション能力育成におけるパネルシアターの教育的意義
	論文発表	子どもによるパネルシアターの教材としての可能性
	口頭発表	ポジティブ感情調節不全に対する心理的介入の適用可能性 —混合研究法による予備的効果検討—
	口頭発表	幼児期における科学的探究の萌芽についての研究
	ポスター発表	Variety of food intake during pregnancy and its association with postpartum depression
	口頭発表	妊産婦のための食事バランスガイドの遵守と妊娠期間中の体重増加量との関連
	口頭発表	高食物繊維小麦粉摂取による腸内環境改善を介した免疫調節効果の検証
言語文化学専攻 博士後期課程	口頭発表	「スペイン統治領フィリピンにおける中国移民のカトリック化」
	口頭発表	「呉昌碩早期における文人交流から見る芸術観の考察」
	論文発表	史料紹介 青木家文書「先祖書写」

	論文発表	〈訳注〉『万国史記』序跋(1)
	論文発表	「呉昌碩早期における文人的思考の考察」
	口頭発表	「博物館による異文化コミュニケーション」
	論文発表	令和七年度共同研究プロジェクト シンポジウム記録 「博物館による異文化コミュニケーション」
	口頭発表	里見軍の東総侵攻と在地城郭(和田城の伝承と椿海)
	論文発表	和田城の伝承と椿海
人間生活科学専攻 修士課程	口頭発表	高アミロース小麦粉の摂取が食餌性肥満モデル マウスの腸内環境および糖・脂質代謝に及ぼす影響に関する研究
	口頭発表	小学生理科における複数単元を通じた批判的思考の表出と契機 ー考察場面と振り返り場面の記述分析を通してー
	口頭発表	理科の授業が連続的な学習活動になるために ー反証場面における仮説の根拠に着目してー
	口頭発表	幼児期の染色活動 ーこころとからだのつながりに着目してー
	口頭発表	小学校4年生の物質学習における粒子概念の転移についての研究 ー児童の不可視な現象の説明内容に着目してー
	口頭発表	黒大豆食育プログラム ～オンライン交流で深まる学び～
言語文化学専攻 修士課程	口頭発表	「時代を超えて行われる文学による再審」
	口頭発表	文学作品を通して見る戦争意識 金ヨロン『文学が裁く戦争ー東京裁判から現代へ
臨床心理学専攻 修士課程	論文発表	心理面接におけるクライアントの不満の表明に関わる主観的体験の質的研究
	論文発表	単科精神科病院での実習を通じて学んだこと
	口頭発表	大学院で学ぼう！～私たちの選択～

X. 他大学との各種連携の活性化に関する活動

現在、現代社会研究専攻では、相互の交流と発展を目指して、社会学分野ならびにその関連分野の授業科目に関して、特別聴講学生の単位互換制度を設けている。詳しくは、「令和 7 年度大学院要覧」27 頁を参照されたい。

XI. 就職支援に関する活動

今後、キャリア教育の充実の観点から就職支援を強化していくための具体的な方策を検討していく。

専攻	主な進学先・就職先	
人間生活科学	就職	・日本児童教育専門学校 ・株式会社YZコンサルティング ・昭和産業株式会社 ・学校法人成蹊学園成蹊小学校
	進学	・大妻女子大学 人間文化研究科 人間生活科学専攻 保育・教育学専修 博士後期課程
言語文化学	就職	・ソニーミュージックグループ ・鶴丸海運株式会社 ・さわかみ投信株式会社 ・株式会社オンデーズ ・株式会社SHIFT
現代社会研究	就職	・学校法人国際学園 星槎大学
臨床心理学	就職	・公益財団法人東京カリタスの家 子どもの家エラン ・医療法人社団翠生会 大森西メンタルクリニック ・相模原市教育委員会 ・風と森診療所

XII. 社会人院生・社会人教育の実質化のための活動

社会人特別選抜の入学者に授業の開講時間など適切な配慮がなされたかについては、アンケートをとったところ、全体の評価は良く、社会人学生から一定の評価を受けているといえる。

また、「大学院設置基準第14条に定める教育方法の特例」により勤務形態に配慮した教育研究体制を希望する学生の入学にあたり、入学先となる人間生活科学専攻教員への周知体制を強化した。

次年度も引き続き、千代田・多摩キャンパスの連携・充実を具体的にどのように推進していくか検討する。

XIII. 研究科設置の主旨に沿った教育方針具体化のための活動

研究科の設置の主旨のひとつである「学部横断的（専攻・専修横断的）な教育・研究体制のあり方」、ならびに、「学位取得に至るまでの組織的指導体制の具体化・実質化」を推進して行くために、平成23年度入学生より、「中間発表会（旧研究計画発表会）」を研究科全体で実施することとし、「修士論文審査等に関する日程」のプログラムの中に位置付けることを決めた。

XIV. その他の活動

「その他の活動」として、院生によるティーチング・アシスタントの実施状況一覧を次に掲載しておく。

ティーチング・アシスタント等について

所属・学年等	担当授業科目					
	開講学科等	授業科目名	授業担当教員名	開講時期	開講曜日・時限	開講校地
人間生活科学専攻 (修士課程) 1 年	家政学部 食物学科 管理栄養士専攻	生活環境実験	田中 直子	前期	木曜 3、4 限	千代田校
	家政学部 食物学科 管理栄養士専攻	人体構造機能論実験	高波 嘉一 森田 純仁	前期	金曜 3、4 限	千代田校
	家政学部 食物学科 管理栄養士専攻	食品学実験	堀内 啓史	後期	金曜 3、4 限	千代田校
	家政学部 食物学科 管理栄養士専攻	基礎調理学実習Ⅱ	玉木 有子	後期	月曜 3、4 限	千代田校
人間生活科学専攻 (修士課程) 2 年	家政学部 食物学科 管理栄養士専攻	実践統計学	清原 康介	前期	金曜 4 限	千代田校
	社会情報学部 社会情報学科 環境情報学専攻	化学基礎実験	鈴木 優志	後期	金曜 3、4 限	千代田校
言語文化学専攻 (修士課程) 2 年	文学部 英語英文学科	Speaking (Basic) A	BARR,B.	前期	水曜 4 限	千代田校
	文学部 英語英文学科	Speaking (Basic) A	IKEDA,KEN	前期	金曜 2 限	千代田校
	文学部 英語英文学科	Speaking (Intermediate) A	BARR,B.	前期	木曜 3 限	千代田校

	文学部 英語英文学科	Speaking (Intermediate) A	BERNINGER,G	前期	木曜 4 限	千代田校
	文学部 英語英文学科	Speaking (Basic) B	BARR,B.	後期	水曜 4 限	千代田校
	文学部 英語英文学科	Speaking (Basic) B	IKEDA,KEN	後期	金曜 2 限	千代田校
	文学部 英語英文学科	Speaking (Intermediate) B	BARR,B.	後期	木曜 3 限	千代田校
	文学部 英語英文学科	Speaking (Intermediate) B	BERNINGER,G	後期	木曜 4 限	千代田校
現代社会研究専攻 (修士課程) 1 年	社会情報学部 社会情報学科 社会生活情報学専攻	量の調査演習	池田 緑	前期	木曜 4 限	千代田校
臨床心理学専攻 (修士課程) 1 年	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	基礎統計学 I	西川 千登世	前期	火曜 3 限	多摩校
臨床心理学専攻 (修士課程) 1 年	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	基礎統計学 I	伊藤 尚枝	前期	火曜 3 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	基礎統計学 II	西川 千登世	後期	火曜 5 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	キャリア心理学セミナー	八城 薫 三好 真 高丸 理香	前期	水曜 4 限	多摩校
	人間関係学部	情報基礎 DS(表計算活用・データリテラシー)	小幡 正子	後期	水曜 2 限	多摩校
	人間関係学部	コンピュータ応用	小幡 正子	前期	水曜 3 限	多摩校

臨床心理学専攻 (修士課程) 2 年	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	社会・臨床心理学基礎セミナー	八城 薫 三好 真 吉澤 良美	前期	火曜 4 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	心理学研究法基礎	堀 洋元	後期	火曜 4 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	心理学研究法基礎	田中 優	後期	火曜 4 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	心理学研究法基礎	伊藤 尚枝	後期	火曜 4 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	基礎統計学Ⅱ	伊藤 尚枝	後期	火曜 3 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	心理学統計法	堀 洋元	前期	金曜 2 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	心理学統計法	八城 薫	前期	金曜 2 限	多摩校
臨床心理学専攻 (修士課程) 2 年	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	社会心理学調査研究法	田中 優 堀 洋元	前期	木曜 1、2 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	心理学研究法応用	田中 優 大久保 暢俊 本田 周二 三好 真	後期	金曜 1、2 限	多摩校
	人間関係学部	情報基礎 DS(表計算活用・データリテラシー)	西川 徹	後期	月曜 3 限	多摩校
	人間関係学部	コンピュータ応用	小幡 正子	後期	水曜 3 限	多摩校

XV. おわりに

令和7年度の「大学院進学意識に関するアンケート」、「大学院の研究・教育に関するアンケート」「大学院修了時アンケート」の3種類の調査結果及び、自由記述の部分について総括しておく。

「新入学者に対しての大学院進学意識に関するアンケート」の回収率を見ると、何度も回答を催促したのにもかかわらず、一昨年度の68.8%、昨年度の81.8%と比較してみると、47.8%に大きく減少しており、令和元年度の同アンケートの回答率94.4%のほぼ半分の結果であった。このアンケートは院生を募集するうえでも重要であり、回収率改善への工夫が求められる。

大学院進学にあたって影響を与えた情報源についての結果を見ると、「教員の業績と研究テーマをみて、将来自分の研究テーマを追及していくうえで最適な場所と考えたから」と「指導教員になる教員との相談」という回答の平均点数が3.5以上と高く、研究目的が明確であり、その研究目的に関連した指導教員との相談を必要としているという学部とは異なる大学院教育の性格というものが浮かび上がっている。

新入学生の希望している大学院修了後の進路については、「臨床心理士として就職したい」と「教育職員（専修）（幼稚園・小・中・高校・栄養教諭）として就職したい」という回答が27%と高く、終了後の資格取得を視野に入れていることがわかる。一方、博士後期課程に進学したいという回答が9%と例年に比べて少ないことがわかる。後期博士課程のない専攻もあり、専攻ごとの独自性はあるものの、研究科全体の充実、修士課程のみならず、博士後期課程の充実も含まれるものであり、修士課程と後期博士課程の連続性についての検討は今後の課題のひとつである。

次に、全大学院生を対象にした授業内容、履修環境、事務体制に関しての「大学院の研究・教育に関するアンケート」の結果についてであるが、大学院の授業全般についての各質問項目に関しての5段階評価の平均4.0以上であり、院生は授業について一定の評価をしていることが伺える。

自由記述をみると、教員に関しては授業に満足している記述もあるが、中には、講義が直前にキャンセルなど十分に実施されていないケースもあることが指摘されている。例外的なものであると考えられるが、決して許容できるものではなく、該当する教員の反省と改善が求められることはいまでもない。大学院担当の事務職員に関しては、丁寧な対応に満足しているという複数の記述がみられたが、大学院の授業の充実には事務職員のサポートは不可欠である。設備等に関して、院生室にウォーターサーバーや個人情報が含まれた研究資料の処理するためのシュレッダー設置の要望があった。また、多摩校の院生室に関して守衛室に連絡をすれば22時まで残ることができるが、23時まで残れるようにしてほしいという意見もあった。他にも図書館に関するものなどの要望もあったが、院生の要望をすべて受け入れるということではなく、そうしたニーズを把握し、教育・研究上必要なものは可能な限り実現していく必要がある。社会人に対するオンライン授業等、柔軟な対応を評価する記述もあり、多くの卒業生を含む社会人院生の増加する中、社会人院生への柔軟かつ充実した対応は今後も継続していくことが必要である。

「大学院修了時アンケート」の結果をみると、「大学院での授業全般」が知識や能力の向上に大きく役立ったと回答しているものが、93.7%と過去最高であった。このことは、大学院の授業が本来の目的を達成していると評価できる。また、「ものごとを分析する力」と「特定の専門分野に関する理解力」68.7%「肯定的な意味で批判的に考える力」、「表現すべき内容の文章を書く力」、「学術的な文献の読解力」「ものごとの本質をみて判断しようとする力」62.5%という高回答率も、本大学院のカリキュラム・ポリシーに基づく教育の結果としてディプロマ・ポリシーに示されたことが実現されていることがわかる。しかし、一方、情報技術（ICT）の運用力が12.5%に留まっている点は、論文執筆上での生成AIの活用が議論されるようになった昨今の課題といえるだろう。

修了時の自由記述を見ると、熱心な指導教員への感謝の意を表しているものが多く見られたが、大学院教育は担当教員の個別的な指導に拠るところも大きい反面、ハラスメントの生じることも少なくない。令和7年度のハラスメントに関する調査結果には「経験がある」が5名、「答えたくない」が3名あり、ハラスメントを推測させる自由記述もあった。ハラスメントはあってはならないものであり、今後もその防止について教員への注意喚起を継続していく必要がある。

以上のような今年度のアンケートの結果全体を踏まえ、本学大学院のさらなる充実を図ってきたい。